

しあわせ

9 月 号



極樂へまいりあひまひらせ候はん
ずれば、なにごとくもくらからずこそ
候はんずれ。

(恵信尼消息)

お浄土でともにお目にかかれば、
すべては明らかになることでしょう。

(意識)

「手を合わす母」

新型コロナで開催が危ぶまれ、数々の制約の中
で行われた東京オリンピック。多くの感動を残し
てくれた。反対意見が多く、関係者の苦労は筆舌
を尽くすものだったに違いない。

まさに台風一過、過ぎ去ってみれば、厳しい夏
の暑さが残る中、万々歳とは言えないまでも大会
関係者は胸をなでおろしているにことだろう。
がけつぷちに立たされたら、不思議に乗り越えて
ゆく智慧と力が生まれてくるのが人間。

開催反対の意見が多かった民意も終わった今は
変化が起きているかもしれない。

何はともあれ、厳しい条件の中でのオリンピッ
クは、まさに歴史に残る大会となった。

「悪を転じて徳となす」何事をも転じて徳に切り
替えてゆけよと仏さまはいわれている。

新型コロナウイルスも人間に智慧と努力を磨け
と伝えに現れ出てきているのかもしれない。

法座案内

法味の会「ご和讃のこころ」

九月十七日 午前十時
お話し 自坊住職

秋季彼岸・永代経法要

九月 二十四日(金) 昼席・夜席
二十五日(土) 昼席

講師 服部法樹師
(豊浜町 登照寺前住職)

聞熏会「仏弟子に学ぶ」

九月三十日 午後二時
講師 内藤昭文師
(本願寺派司教)

会費 一〇〇〇円

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、
検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三
栢原山 龍仙寺

電話(〇八二二)二八二四八二



今月から、仏教に伝わる古今のさまざまに「ことば」を味わっていきます。まずはじめは、親鸞聖人の妻・恵信尼さまのことばを紹介いたしましょう。親鸞聖人より九つ年下であった恵信尼さまは、聖人がご往生されたときには越後におられ、そのまま越後で生涯を終えられました。京都におられた末娘の覚信尼さまにたびたびお手紙を出しておられ、八十七才の三月に出されたお手紙が最後となっています。今月の掲げさせていただいた言葉は、そのなかに記されている一節です。

お手紙によると、恵信尼さまは、急に翌日の暁（午前四時ごろ）に旅立つ人に手紙を託せることになり、夜おそい亥の刻（午後十時ごろ）に筆をとられたようです。何度もくりかえし、「あまりにも暗く、どのように書いているのか分かりません。とても読めなんでしょう」と、お手紙の中で心配されています。電気もなく、メガネもない鎌倉時代、しかも

八十七才というご高齢ですから無理もありません。末筆には「はりすこしたび候へ（針を少しください）」とありますので物資も十分ではなかったようですが、手もとの見えない夜の闇のなかで、恵信尼さまはどのようなお気持ちで筆をとられていたのでしょうか。

お手紙のなかで恵信尼さまは、「自分は寅のときの生まれだから今年もう八十七になり、今年こそお浄土に参らせてもらうことになるでしょう」と言われています。そして、覚信尼さまからもらった「あやの小袖」を臨終のとき着るために大切にもっており、「よにうれしくおぼえ候（とてもうれしく思っています）」と仰っています。この状況で「うれしい」という言葉が自然に出てくるあたりで、まなざしの違いを感じます。

続いて、「あなたの（覚信尼）の子どものこと、とても知りたいと思っています。あなたにも、もう一度、この世でお会いしたいと

思っております」と、京都で暮らしている孫と末娘に会いたい気持ちをしたためつつも、「わたしは今すぐにも、浄土へ往生させていただくことになるでしょう」と述べられます。今月の言葉は、その後に続いています。

極楽へまいりあひまひらせ候はんずれば、
なにごとともくらからずこそ候はんずれ。

お浄土でお目にかかれば、すべては明らかになることでしよう。これが恵信尼さまが最晩年に見つめておられた命の風景でした。

わたしたちは往々にして、生きていてこそ会える、分かりあえると考え、命の終りには死という暗い闇をみています。しかし、わたしたちは本当に、会えているでしょうか。分かりあえているでしょうか。今もこの原稿を書いているわたしの膝で、幼い次女が泣いています。なぜ泣いているのか、本人にも言葉にできないようで、わたしには汲みとってあ

げようもありません。一方、母は脊柱管狭窄症の手術のため、さきほど入院しました。長年患ってきた痛みと痺れももう限界のようです。一秒すら、その痛みを代わってあげられません。たとえ親子でも、分かっただけで、あきらめられない悲しみがあるでしょう。真向かいになってもすれ違うほかなない心を抱えて、わたしたちは生きています。恵信尼さまはその娑婆の悲しみを、手もとの見えない夜の暗さに重ねておられました。そして同時に、なにごととも暗からず、「ああ、こんな心を抱えていたのですね」「ここに、あなたはいたのですね」と頷きあい、ともに会える浄土のよるこびを仰ぎつつ、筆をとっておられました。

虚しく亡くなっていく命ではない。永遠の別れに終わるのでもない。なにごととも暗からず、すべてが明らかになる世界に、会える世界に、生まれさせていただく。それが念仏者が歩ませていただく命の風景なのです。